資料1　讃美歌誕生の歴史

作成　2026-11-15　岡本雅幸

1．作詞者ヘンリー・カーク・ホワイト（Henry Kirke White 、1785-1806）の生涯

前回の「讃美の力集会」で取り上げた C.ウェスレー（1707-1788）が築いた讃美歌の伝統と大衆伝道の熱気が漲る 1785 年、イングランドのノッティンガムで、父が精肉業を営む家庭の六人兄弟中三番目として生まれました。しかし家庭は父親の稼ぎだけでは子供たち全員に十分な教育を受けさせるのが難しいほど貧しく、彼は 14 歳で靴下織り職人の徒弟に出されたこともありました。その一方で、「才能を見抜いて最高水準の教育を授けさせようとした知的な母親」という、相反する親の方針が交錯する環境で育ちました。そのノッティンガムは、17 世紀末迄は「イングランドで最も美しい町」と評される風光明媚な商業都市でした。しかしホワイトが生を受けた頃の街は、産業革命による急激な工業化と人口爆発、スラム化と深刻な公衆衛生の悪化、そして既存の国教会に対する多様な宗教・思想運動（大衆伝道や急進的な理神論・懐疑主義）が激しく交差する街でした。

・理神論、懐疑主義への傾倒（1801 年頃）

当時は産業革命や科学の発展により「伝統的な教会の教え」から離れる若者が多くいました。非常に知的で向学心旺盛なホワイトも 1801 年前後に（16-17 歳）、理神論（*1）という「理性の誘惑」に強く引きつけられ、懐疑主義（*2）という「嵐に吹き煽られる海の波」に翻弄されました。しかし、これは彼が真のキリスト教信仰へと回心していくための重要なステップでした。ただ、この頃既に、彼は当時のノッティンガムで最も一般的かつ致命的な風土病であった結核（*3）を発症していました。

・劇的回心（1803 年頃）

18 歳頃、ホワイトの親友ロバート・ホワイト・アーモンド（Robert White Almond 、1786-1853）が回心しました。アーモンドはホワイトを気遣ってそのことを打ち明けませんでしたが、日常の行動の変化がホワイトの心を捉えました。そして、二人の間の議論とトーマス・スコット著『真理の力（The Force of Truth）』を読んだことから、同年 11 月頃までにホワイトも劇的回心へと導かれたのです。そして試煉と誘惑に勝利したホワイトは強靱でエモーショナルな信仰へと導かれ、これが彼の短くも熱烈な創作活動の源泉となりました。

2．讃美歌“The Lord our God is clothed with might”の誕生（1806 年）

・大学での猛勉強と揺るがぬ信仰

1805 年、周囲の支援により奨学金（sizarship）を得てケンブリッジ大学のセント・ジョンズ・カレッジへと進学できたホワイトは、聖職者を目指して神学を学び始めます。しかし、その猛勉強により結核が致命的に悪化しましたが、彼は死の前年に、死を受け入れ信仰に生きる喜びを友人宛の手紙にこう記しています。

> 「すべてが失われたとしても、キリスト・イエスを通じて決して失望することのない神という隠れ家を持っている宗教的な人間は、どれほどの宝を手にしていることか」（1805 年 11 月の手紙）。

「罪の意識」、「死の恐怖」や「心の苦しみ」の内にある人に暖かな救いの手を差し伸べない知的で合理的な理神論の神ではなく、聖書を通してご自身を啓示しておられる主なる神イエス・キリストに彼は抱かれたのです。

・作詩

在学中の 1806 年 10 月 19 日に 21 歳で召されました。その直前、ホワイトは最後の力をふりしぼって『The Lord our God is clothed with might』を書き上げました。「理性の誘惑」と「嵐に吹き煽られる海の波」から救い出された喜びを、ウェスレー兄弟と同様、讃美を通して爆発させたのです。

・メロディーとの組み合わせ

1807 年、ホワイトの早逝を惜しんだ、イギリスの桂冠詩人ロバート・サウジー（Robert Southey 、1774-1843）が出版した『遺稿集（The Remains of Henry Kirke White）』で大きな反響を呼び、1812 年には、ウィリアム・ベンゴ・コリアー（William Bengo Collyer）が編纂した賛美歌集に収録されました。

その後「コモン・メーター（C.M. / 8.6.8.6）」という標準的韻律（メーター）で書かれたこの詩は、欧米のさまざまな教会の讃美歌集編集者たちにより「ST.ANNE」や「MANOAH」「TAPPAN」等の同じ韻律を持つ伝統的な旋律と組み合わされて出版され、広く歌われるようになりました。

3．日本語讃美歌 77 番

これまでこの集会で取り上げてきた讃美歌は、日本語讃美歌のメロディーで原詩を自然に歌えましたが、今回は困難です。英語圏で歌われる『The Lord our God is clothed with might』の旋律とも異なります。なぜこの様な事が起きたのでしょう。

この讃美歌が『讃美歌』（1954 年版）に讃美歌 77 番として収録された時、「原詩の力強い神の主権や創造の威光を日本語の文語・口語で格調高く表現すること」「会衆が力強く歌いやすいこと」が配慮されました。そこで、『ELLACOMBE』（*4）と呼ばれる二倍の長さの韻律（8.6.8.6 ダブル）を有する旋律が採用され、それに合わせて訳詞されました。この日本独自の組み合わせがスタンダードとして定着して今日に至っています。

■参照情報

*1：理神論

無神論とは異なり、神の存在は認めますが、神は万物や自然法則を創造後、それらを支配も摂理もしないと考えます。また、聖書の奇跡、預言、超自然的啓示を否定し、人間理性により全て合理的に理解しようとします。

*2：懐疑主義

聖書や信条、教会の権威といった「無条件に信じられてきたもの、真理の主張」に対して根拠や妥当性を厳しく問い直し、安易な独断を退ける立場です。

*3：19 世紀初頭のイギリスにおける結核

当時は主に「消耗病」などと呼ばれ、結核が「細菌による感染症」であることは未だ知られず（コッホによる結核菌発見は 1882 年）、有効な抗生物質も無い時代でした。結核は貧困層・肉体労働者を中心に爆発的に流行し、一度発症すると激しく咳き込み衰弱していく不治の病でした。しかし当時のイギリスはロマン主義の時代。結核は現代からは想像できない奇妙な二面性を持つ病でした。結核特有の症状である「痩せて青白い肌」「熱で赤くなった頬」「ギラギラと輝く目」が、「儚げで上品な美しさ」や「高い精神性・芸術的才能」「佳人薄命」の象徴となり、結核は「美しく、芸術的な病」として謎のロマン化を遂げていました。

*4：『ELLACOMBE』

『ELLACOMBE（エラコム）』の原曲は、1784 年ドイツで出版された聖歌集『Gesangbuch der Herzogl. Hofkapelle』に「Ave Maria, klarer und lichter Morgenstern（めでたしマリア、清く輝ける明けの明星）」として初めて収録されました。その後ドイツ国内の様々な讃美歌集に収録されイギリスに渡る間に編曲もなされ、1868 年、英国の代表的讃美歌集『Hymns Ancient and Modern』の補遺版（Appendix）にこの旋律が取り入れられた際に「ELLACOMBE」と名付けられました。

現在、この旋律は様々な教派で非常に人気があり、

・アイザック・ワッツ（Isaac Watts）作詞の有名な讃美「I Sing the Mighty Power of God」の日本語訳
　『讃美歌 21』357 番「力に満ちたる」
　『新生讃美歌』121 番「み神の力をほめたたえよ（A）」
・1962 年出版『Hymns and Songs for Church Schools』176 番「The World One Neighborhood」

などがあります。

以上